

熱中時代



④《刑事編》

日本テレビ



時代



テレビ小説
熱中時代 ④
刑事編

検印省略

☆定価はカバーに表示
してあります。

原 作 者 布 勢 博 一
編 著 者 新 樹 瞳 志
発 行 者 昭和 54 年 9 月 14 日
発 行 者 岩 淵 康 郎
発 行 所 日本テレビ放送網株式会社
東京都千代田区二番町 14 番地
郵便番号 1 0 2
電話東京(03)265・2111(大代表)
振替東京 0-153213 番
発 売 元 読 売 新 聞 社
印 刷 凸 版 印 刷 株 式 会 社

目次

1	ガマンしろ、お前は刑事の女房だ！	5
2	愛の結晶、砲丸おにぎりはいかが？	34
3	兇悪犯のアジト、五一一号室を急襲せよ！	56
4	七夕に30本のダイナマイト花火？	89
5	ああ電子ジャ―よ、グッドバイ！	119
6	タケシ&ミッキー水道屋に変身！	148
7	ネコババを捕えてみれば親孝行？	182
8	あれから半年、ベリーハッピー！	208

熱中時代④ 刑事編

1 ガマンしろ、お前は刑事の女房だ！

1

ジョギングする人々の姿が、舗道にチラホラする時刻、まだ眠りからさめていない街の一画にある二階建事務所風の建物の前に、おなじみの顔が集まっていた。潮田衛太郎をはじめとする大門署の刑事たちだ。むろんその中に、わが早野武の顔もあった。

建物の表には『鬼形興行』と書いた木の看板がかかっており、軒さきには、菱形に鬼の一字を入れた金ビカの代紋がうちつけてある。

いうまでもなく、この辺一帯に勢力を張る暴力団鬼形組の本拠である。

時計をのぞいた潮田が、小さくうなずくのを合図に、固くとざされたドアのそばに歩みよった菅谷が、慎重な手つきでブザーを押した。

一秒、二秒、三秒……返事がない。刑事たちの表情がさらにきびしさを加える。

潮田をふりかえった菅谷が再びブザーを押した。が、返事がない。勘づかれたか、そんな疑惑

が彼らの胸を一樣によぎったとき、

「だれ……」

ドアの向こうから、面倒くさそうなダミ声が漏れてきた。

「あ、すみません、ちょっと」

すかさず菅谷がドアに顔をすりつけるようにしていった。

「となりの村山ですけど、うちの前にある車はおたくのじゃありませんか。もしおたくのですしたらちょっとどけていただきたいんですけど」

「なに、車。うちの車だって？」

あとはブツブツひとりごとになったが、鍵をはずす音がした。菅谷が一步さがる、次の瞬間、ドアが開いてスポーツ刈りの若者が、ふくれっ面をみせた。

その鼻つききに、つきつけられたのは一枚の紙切れだった。

「鬼形組組長鬼形大吉、同じく若者頭青村達也の逮捕状だ」

一步なかへふみこみながら、潮田が声を張る。

「な、なんです、旦那、なんで逮捕状なんか」

「恐喝暴行傷害容疑だ、鬼形と青村はどこにいる！」

「いませんよ、組長は！」

男は彼らの侵入をくいとめようとして大手をひろげたが、不意に奥へにげこみながら、

「手入れたっ、サツがきたぞっ」

と、大声でわめき散らした。

「それっ、逃がすな！」

潮田の命令を待つまでもなく、奥へ突っこむ刑事たち。そこへステテコ姿の組員たちが手に手に木刀や鉄パイプ、チェーンなどを持ってかけつけ、たちまち入り乱れての大乱闘がはじまる。椅子がとぶ、電燈がはじける、ガラスが木っ葉微塵にくだけ散る！

「よさねえか、てめえたち！」

格闘の最中、頭の上からドスの利いた声がとんだ。

そのひと声で、いままで暴れていた組員たちがビタリと動かなくなった。みると二階から悠々とおりてくる五十がらみの男がいる。髪はうすく、腹がぐっとせりでて相撲取りのように大柄だった。組長鬼形大吉である。うしろにつき添って階段をおりてきたのは内妻のミキだ。水商売あがりの、一応ととのった顔立ちだが、切れあがった目尻がいかに勝気な気性を表わしていた。

「どうも。若い者がつい逆上してご迷惑をかけました。鬼形です、お役目ご苦労さんです」

不敵な笑みさえうかべて、潮田に挨拶する鬼形。すでに覚悟はできているのか、ちゃんと着物を着がえていた。

「鬼形、青村はどうした？」

逮捕状をみせてから、潮田がきいた。

「さア。あいつはここへはきていませんよ」

「いい加減なことをいうな。ゆうべ遅くおまえとふたり、ここへ帰ってくるところをつきとめて
いるんだ」

「朝まで一緒につき合ってたわけじゃありませんから。おい、ミキ、持ちものは大丈夫か、齒ブ
ラシ入れたらうな」

ムシヨ行き覚悟の鬼形は、潮田の追求をはぐらかすようにミキへいった。

2

大門署へ連行された鬼形は、すぐ取調べ室へ入れられたが、恐喝の事実をなかなか認めようと
しない。そこは海千山千のタヌキだから、スラリスラリと逃げて容易にしっぱをつかませなかつ
た。

「私はね、組の者にも日頃からよくいってるんですよ、これからはまっとうな商売でオマンマを
頂かなくちゃいけないって」

まっとうどころか、オドシ、ユスリ専門なのに、鬼形はいけしゃアしゃアとして神妙な口をき
いた。

「じゃア、なんだってドスだの木刀だのがでてくるんだ。おまえの事務所から」

「いや、どうも。血の氣の多いものばかりですからね。なにしろ親にも見離されたような連中を

預かっていると、ちつとやさつとじゃいうことをききませんから」

「とぼけるな、口さきだけできれいなことぬかすんじゃないよ！」

たまりかねて怒鳴ったのは、そばでベンを走らせていた武だ。鬼形がまるで社会事業でもやっているような口を利くので、怒りが爆発したのだ。

だいたい暴力団が街の下真ん中に、れいれいしく代紋を飾りたてて居座っていること自体が、彼にとって不都合千万なことなのだ。江戸時代のヤクザだって、現代のように大っぴらにのさばってはいまい。

「まアまア、早野、まかしとけ、おれに」

カッカしている武をなだめてから、潮田はさっきより一層くだけた態度で鬼形に話しかけた。

「ところでどうだい、こっちの方は」

と、魚を釣る仕草しぐさをしてみせる。

「釣りですか、この間行きましたよ、大血川おちがわ、知ってますか」

「奥秩父おくちちよか？」

「下の方でね、わりと型のいいヤマメがでるんですよ」

「ホウ、尺モノかい？」

潮田が水をむける。

「ええ、尺二寸というのをあげましたがね」

「糸は、道糸が1号でハリスが08ぐらい」

「私は06の通しですよ。針は秋田袖の八号一本」

「へえ、そんな細い糸でね、大した腕じゃないか」

目を丸くする潮田を横目でうかがいながら、武はひとりいらしていた。うちのボスは相手が暴力団の大モノというので、少し遠慮しているのではないか。警察はそんな弱腰でいいのか。だから奴らになめられるんじゃないのか！

一応の調べがすんで部屋へもどってきた武は、こらえていた憤懣をいっきに潮田にぶつけた。

「係長、あんなやり方でいいんですか。釣りの話ばかりじゃないですか。手ぬるいんじゃないですか、相手は鬼か蛇かといわれた鬼形ですよ」

「うるせえな。おまえはおれのやること、だまってみてりゃいいんだよ」

潮田がにがい顔をして、菅谷のさしだす茶をのどへ流しこんだ。

「だまってみてられませんか。そうじゃないですか。あいつに半殺しになった市民が何人もいるんですよ。暴力団なんだからガンガンやつつけりゃいいんだ」

「あのね、どなられておそれるのはチンピラだよ。鬼形クラスになるとね、釣ろう釣ろうとあせるより、むこうから食いついてくるのを待つことだ」

「おまえには、ただの釣りの話にきこえるだろうが、ありや係長と鬼形の腹のさぐりあいだよ」
千馬と菅谷が、ベテランとルーキーのちがいはそこなんだとばかり注釈を入れた。だが武には

どうしても納得がいけない。腹のさぐりあいどころか、馴れ合いともとれかねない態度ではないか。ガンガンやるべし、ガンガンと！

「どう、ぼくを暴力団の組長だと思って調べてみるかい？」

むくれている武の腹の内を読んだのか、前原が妙な提案をした。

「ぼくがですか？」

「そう。貫禄不足だから気がのらないかね」

「いいえ、そんなことはありません」

「じゃやろう。きみの思ったとおりやってみろ」

前原にいわれて武もその気になった。ひとつ、ガンガンおしまくって先輩連中をびっくりさせてやるか。

「どうもご苦労さまです。お手数をかけます」

前原が机の前に座って頭をさげた。もう暴力団の組長に変身している。ふてぶてしい態度、ドスの利いた声音。目のくばりようも凄味がある。

よし、そっちもそうならこっちもボスに変身とばかり、武は腹に力を入れた。

「おい、鬼形、青村はどこにいるんだ。青村は。正直に吐くんだ」

「存じませんねえ」

と、前原がうそぶく。

「しらねえはずはねえだろう、いえったらいえ！」

ガンと机をたたくが、相手は涼しい顔。

「あわてしゃんすな、日はまだながい」

歌の文句できりかえした。

「この野郎、いい加減にしろ」

腰を浮かして怒鳴りつける武に、

「スピッツみたいに吠えなさんな、刑事さん。ま、タバコでも一服つけたらどうですか」

「う、うるさい。吸いたいときは勝手に吸う。おまえの世話にはならん！」

ガン！ とまたテーブルを叩いた。その拍子に茶碗をはねとばし、もろに茶を顔に浴びた。

「これがホントのオシヤカサマだねえ」

眺めていた千馬が、くすつと笑った。

「早野の判定負けだ」

と、潮田がいった。

「目をキョロキョロするし、相手の挑発にはのるし、ザマアねえや。まだまだ青いよ」

菅谷にとどめを刺されて、武はガックリと肩を落とした。

「おじいちゃん、大変よ」

テレビの前に座っていた乙吉が、その声でふりむいた。美弥が夕刊を手に行っている。

「これみて。ホラ、武さんが新聞にでてる」

「ほんとうかい」

ひったくるようにして新聞をとった乙吉が三面に目を据えた。

出ていた。「鬼形組組長逮捕」の見出しの下に事務所を出る鬼形の写真がのっていて、彼の傍らにまるで介添のような格好で武の顔がうつっている。

「なるほどなア」

「なにを感じしてるのよ、おじいちゃん」

じれったそうに美弥がたずねた。

「主役は鬼形大吉だろ」

「きまつてるじゃないの」

「癪^{しゃく}だけど、武坊の方が貫禄^{かんろく}負けだなア、どうみても。そう思わねえかい」

「暴力団がずうずうしすぎるのよ、大きな顔をして写真にとられることないと思うけど。でも武さんはじめて新聞にのったのよ」

「そうだったな、記念の新聞だ、切りぬいて神棚にあげとけ。それから二階、タタミふいたかい」

「いわれるまでもないわ」

美弥がOKというように、親指と人差指で丸をつくった。タタミまで拭いたのは、明日ミッキーが帰ってくることになっていたからだ。

「ウフフ、武さん、内心待ち遠しいんでしょね、こんな暴力団狩りをやっていても」

「それよりも美弥、ひと言いっておきてえことがあるんだ」

乙吉が神妙な顔をむけた。

「なによ、急に改まって」

「アメリカ人ってのはキッスでも大っぴらだろ。昼間だってうっかりあがって行くと、それこそ、見てはならねえもの見ちゃってさ、アラ失礼、アイアムソーリってなことになっちゃうだろ」

「いやらしいわね、おじいちゃんは」

「なにがいやらしいんだよ」

「だってさ、そんなことばかり想像してさ」

「想像なんかしてませんよ、してませんけどねエ」

いいかけて乙吉はつまった。やっぱりどうも頭の中にキッスのシーンなんかがしきりにチラつくのだ。テレビの見すぎかもしれない。

「おい、美弥、おまえやっぱり横浜のお父ちゃんとお母ちゃんのとこへ帰れ」

「どうして？」